令 和 8 年 度

# 高等学校入学試験問題

## 国　語

受験上の注意

◎ 時間……45 分

◎ 解答はすべて，別紙解答欄に記入すること。

◎ 字数制限のある場合，句読点，カギなどの記号も字数に入れるものとする。

**第一問題　次の Ⅰ ・ Ⅱ の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

Ⅰ

求める情報も求めない情報も、簡単に目に入る時代になりました。インターネットが急速に普及し、ＳＮＳで誰でも発信できるようになった一方で、注1フェイクニュースが溢れ、災害時にはデマが拡散される。容易に「つながり」を持てるからこそ、何を信じたらいいかが分かりづらい世界になったと思います。

「つながりたくない」と思うとき、問題の根本は「つながること」自体より「つながり過ぎること」にありそうです。情報や評価に振り回され、自分を見失う不安を抱く人が増えているのかも知れません。①僕にとっても、無縁ではないテーマです。

プロスケーターになり、この夏で丸三年。②これまでとは全く違う世界で挑戦している実感があります。競技者として過ごした十八年はある意味、点数に一喜一憂する時代でした。演技の「善し悪し」は、ジャンプやスピンという技術的要素が反映された点数で決められていた。いま僕が立つ舞台では、善悪の判断は観る人の価値観に委ねられます。ルールや点数に縛られない「自由」は、創作意欲を一層掻き立てますが、怖さも伴う。評価の中身が点数から観る人の言葉や感情に置き換わり、「本当に善いものを届けられているか？」「期待に応えられているか？」と、自問することが増えました。

不安と向き合い、辿り着いた法則の一つに「③二六二の法則」があります。意訳すると、周りの人を一〇としたとき、自分を理解し信頼し合える人が二割、ほどほどに好感を持つ人が六割、残りの二割はまったく理解し合えない人という具合に確率分布されるというもの。僕が心の中で大切にしている法則です。

すると、まずは二割の方の信頼を得て、六割の人にも善い演技を届けることが僕の役割、ということになる。もちろん、欲を言えば残りの二割の人にも届けたい。ですが、たとえ届かなくても、八割の人に届くものを作れたと誇れる活動を続けることで、自信が保てるようになりました。

同様に、世間の評価やＳＮＳでの誹謗中傷も、「自分を知る」作業がきちんとできていて、やりたいことが明確になれば、さほど気にならないはずです。波があっという間に来て、あっという間に去っていくこの世界では、その波にブレる必要も揺らぐ必要

もない。揺らぐ暇があるなら、観てくれた人の心を揺るがせられる演技をする努力を続けようと、心に決めました。

思うに、④「自分を知る」ための手段は案外、生活圏内には転がっていないものです。「自分」は、独りで抱え込んで悩んだ末に見つかるものでは、たぶんない。僕なら、音楽に触れる、作品世界にのめり込む、あるいは自然の光景の中に自分を発見します。ちょうど自分の姿を鏡越しにしか見ることができないように、自分の本質も、他者という鏡に映して初めて知ることができるのだと思います。

世界とつながり、自分を知って、表現したいものが掴めたら、今度は、物語や振り付けを考える時にはつながりを断って没頭します。ただ、表現者としては伝わらなくては意味がありません。生み出したものが伝わるものになっているかどうか、チームで対話を繰り返します。

いま、多くの人の心の中に「つながりたくない」という気持があるとしたら、その背景には、メディア上の他者が輝いて見え過ぎている問題もある気がします。ですが、メディアに取り上げられてきた僕が思うのは、誰一人、特別な人間なんていないということです。僕は本当に普通の人間で、ゲームも好きだし、実況動画をひたすら見て過ごす日だってある。けれど、映されるのはいつも、僕の人生のハイライトです。

表現者としての原点に東日本大震災があります。被災地を回り、被災者の方々に教わったのは、ニュースで報じられる何千、何万人という数字のその一の中にある人生の重さでした。一人ひとりに物語があり、どんな人生も等しく尊い。報じられることがなくても、⑤〝オリンピック連覇〟や〝四回転半〟は、それぞれの人生に確かに存在します。

最近、羽生結弦という存在は、支えてくれる方々の思いが反映された媒体だとも感じます。人は、つながらずに生きることはたぶんできない。それなら、つながりを拒否するより、つながったことで見えた自分を大切にしたい。結果的にそれが、つながり過ぎないことにもつながっていくと思います。

（羽生結弦「つながらない新生活様式」『文藝春秋』令和七年七月号）

注1　フェイクニュース　…意図的なうそ、または誤解を招くような情報が、本物のニュースを装って流されるもの。

Ⅱ

注2パンデミックのあいだ、私も夫もずっと家にいるので、猫はそれがふつうのことと思ったようだ。一応落ち着いて、旅行も会食も以前に戻ったとき、私たちの帰りが遅いとものすごく怒るようになった。パンデミック前はそんなことはなかったのに、遅く帰るとずっと文句を言いながら玄関に走ってくるのである。

私はその猫の様子に、「⑥人間もまたしかり」と深くうなずいた。携帯電話が普及して、どんなときも通話可能になると、相手がいつでもそこにいると私たちは思いこむし、ラインやショートメールが出まわると、メッセージを送れば相手は即座に受け取り、すぐに返信すると思いこむ。

わが家の猫は、飼い主の帰りが遅いことに十年間も慣れていたのに、たった一年で「人は家にいるもの」と思うに至った。私たちもたった数年で、電話はすぐに通じるし、メールの返事はすぐにくるし、ラインは即座に既読がつくものと思うに至り、それらいっさいに応じなければ、それは拒否の意思表示だととらえられるようになった。そうじゃなかった昔のほうが、ずっと長いのに！

そんなに急ぎの用でもないのに、何度も電話をくれる人がいる。あるとき私はコロンビアに出張中で、ミーティングや取材が続いて電話に出られず、ホテルに帰ったときにまた電話が鳴ったのでようやく出ると、本当にどうでもいい用事で、「すみません、今コロンビアなので、帰国したらこちらからかけてもいいですか」と訊いたら、「は？」と返ってきた。だからなんですか、というニュアンスの「は？」だったので、ちょっとびっくりした。コロンビアだろうが杉並区だろうが、相手が電話に出れば「話せる」ことだと、その人は思っていたのだろう。

私は忘れっぽいので、平日の仕事時間中（八時半から十六時半）に受け取った返信必須のメールには三十分以内に返信している。それが続くと、この人は返事の早い人という印象を相手に植えつけるらしく、二日、三日と返信できずにいると「先のメールは届いておりますでしょうか」と確認メールがくる。それが圧となり、三十分が十分に短縮されて、⑦ますます悪循環となる。

これを断ち切るには、返信を遅らせるしかない。相手の「人はそこにいるもの」という思いこみを崩していくしかない。

二〇二三年に、じつに二十年ぶりに、一週間の休みをとってひとり旅ができるようになった。ひとりで異国の町を歩いていて思

い出すのは、二、三十代のころの旅である。携帯電話なんてなかったしインターネットもなかった。一か月旅をしているあいだ、だからだれとも連絡しなかった。仕事のやりとりが生じたときは、電話屋さんで国際電話をかけ、ちょっといいホテルに泊まってファックスを送ってもらっていた。

一か月も音信不通なんて、今にしてみれば信じられない。旅のあいだ、ずっとひまだった。一日移動し続けてもひまだった。あんな旅は、この先もう二度とできない。

でも、「人はそこにいるとはかぎらない」というほうがふつうではないのか。電話がつながらなければ、メールの返信がこなければ、ラインの既読がつかなければ、人はそこにいなくて、どこか遠くにいっている。⑧これを忘れてはいけないんじゃないか。

この一週間の旅のあいだ、スマートフォンでメールを見ることはできるので、旅しながらそれらを読むものの、がんばって返信せずにいた。がんばらないと、返信してしまいそうになるのだ。私自身も、「人はすぐに返信するもの」という思いこみに浸っていると実感する。

一週間の休みは二〇二四年もとれたので、このときもがんばって返信せずにいた。正直に言うと、ときどき我慢できずに返信をした。だめだなあ自分、とその都度、謎(なぞ)に落ちこんだ。

先だって、とある人に返信の必要なメールをしたのだが、二週間たっても返事がこず、もしかして迷惑メールに分類されてしまったのかも、とちょっと不安に思っていたところ二十日くらいたって、「電波の届かない山奥にいて、返信が遅れました」というメールが届いた。返信をせかさなくてよかったと思った。そうそう、人はそこにはいないもの。コロンビアにいたり山奥にいたり、ネット断食(だんじき)をしていたりするもの。そっちのほうがふつう。みんながそのふつうに慣れればいいのだ。

（角田光代「つながらない新生活様式」『文藝春秋』令和七年七月号）

注2　パンデミック　…ある感染症が国や地域を越えて、世界的に大流行すること。

**問一**　――線①「僕にとっても、無縁ではないテーマです」とあるが、なぜ「無縁ではない」のか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　自分を評価する人があまりにも多いため、すべての評価を受け入れることは不可能だから。
イ　これまでが点数によって評価される生き方だったので、点数でしか自分を評価できないから。
ウ　観る人すべての評価に耳を傾けなければ、人を感動させるような演技はできないから。
エ　観る人の価値観に評価の基準を委ねると、自分を見失うことにつながるおそれがあるから。

**問二**　――線②「これまでとは全く違う世界」とあるが、どのようにかわったのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　成功の基準が、表現の独自性からスケートの技術に移り変わった。
イ　評価の中身が、点数から観る人の言葉や感情へと置き換わった。
ウ　信じるものが、普及した情報から各自の判断に入れ替わった。
エ　人とのつながりが、信頼関係から自然法則へと差し替わった。

**問三**　――線③「二六二の法則」とあるが、それを大切にすることでどのようになると筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　理解し合えない二割の人にも届ける努力を続けて、理解し合えるようになる。
イ　理解し合えない二割の人について、完全に無視することができるようになる。
ウ　六割のほどほど好感を抱く人を、善いと感じる二割と区別できるようになる。
エ　八割の人に届くものを作ればよいと思えることで、自信が保てるようになる。

**問四**　――線④「『自分を知る』ための手段」とあるが、「自分を知る」ためには何を用いればよいかを筆者は比喩（ひゆ）的に述べている。その表現を本文中より五字以上十字以内で抜き出して答えなさい。

**問五**　――線⑤「〝オリンピック連覇〟や〝四回転半〟は、それぞれの人生に確かに存在します」とあるが、「〝オリンピック連覇〟や〝四回転半〟」は何の具体例か。本文中から八字で抜き出して答えなさい。

**問六**　――線⑥「人間もまたしかり」とあるが、人間の場合においてどのような点が「しかり」と言えるのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　携帯電話や電子メールの情報量に対して、適度な関わりができればそれで十分だととらえるようになる点。
イ　携帯電話や電子メールの普及により、相手は即座に返答することが普通だと思いこむようになる点。
ウ　携帯電話や電子メールの便利さに慣れてしまい、それなしでは暮らしがまったく成り立たなくなる点。
エ　携帯電話や電子メールのわずらわしさに追われ、できるだけそれらを利用する機会を減らそうと努力する点。

**問七**　――線⑦「ますます悪循環となる」とあるが、どのような状態を悪循環ととらえているのか。四十五字以内で説明しなさい。

**問八**　――線⑧「これを忘れてはいけないんじゃないか」とあるが、「忘れてはいけない」のはなぜか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　メールや電話が即座につながらなければ異常だと不満を抱くようになるから。
イ　メールや電話があることを逆に不便だと思ってしまうことになるから。
ウ　メールや電話の受信数だけで人の価値を判断することになるから。
エ　メールや電話のせいにして旅そのものを楽しもうとしなくなるから。

**問九**　次の会話文に示すのは、授業で本文 Ⅰ ・ Ⅱ を読んだ後の話し合いの様子である。これを読んで後の問いに答えなさい。

〈会話文〉

教師　：この二つの文章は、著名な雑誌の「つながらない新生活様式」と題した企画から抜粋したもので、『即レス』にウンザリなあなたへ『超多忙な16人』からのアドバイス」という体裁をとっているものなんだ。

生徒A：たしかに人とのつながりは、かなり神経を使う部分があり、「即レス」がこんなに疲れるのならかえってSNSなんてない方がいいと感じることはあるね。

生徒B：ただ、羽生さんは「［あ］。」と言って、人とのつながりは大事だととらえているようだし、角田さんも直接的ではないけれど「ときどき我慢できずに返信をした。」と言っているように、人とのつながりは無視できないようだね。

生徒A：その上で、羽生さんは、まったく理解し合えない人がいることを前提として、自分というものを保っていくという方法をとり、一方、角田さんは、［い］と考えているね。

教師　：誰とでもすぐにつながることができる便利な世の中だからこそ、この二人の視点を取り込むことはたしかに私たちにとって貴重なアドバイスになっているかもしれないね。

(1)　［あ］に当てはまる表現を［Ⅰ］の本文中から二十二字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

(2)　［Ⅱ］の筆者である角田さんは「つながらない」生活様式を保つためにどうすればよいと述べているか。［い］に当てはまる表現を「ふつう」という言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

**第二問題　次の Ⅰ ・ Ⅱ の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

Ⅰ

「理解できた」と、「わかった！」という感覚とは、本質的にちがうところがある。

①「理解できた」というのは、他人からくわしい説明をうけ、それを論理的にわかることであると考えられる。つまり、これまで知らなかった知識を与えられ、それが論理的に自分のもっている知識と整合的であるという場合に、理解できたということになる。

これに対して、②「わかった！」というのは、どういう場合なのであろうか。それは、注1ミッシング・リンクのようなものだと考えられる。つまり、話題になっていることに関連した知識はほとんどもっている、しかしその話題がその知識によって解釈できない、という状態にあって、そこで何かのヒントを得た結果、もっている知識によってその話題が完全に解釈できるということがわかったとき、「わかった！」ということになる。その場合はただちにその解釈結果をわかった結果として答えることができるという場合である。

幾何学の定理の証明の道すじを発見したという場合は、ほとんどこの場合である。先の「五〇注2ヤードなので柔らかさが重要であった」という表現も、ゴルフの場面であるということがわかれば、ゴルフで苦労している人にとっては「わかった！」ということになる。この例からもわかるように、「わかった！」というのは、知識を得たのではなく、自分のもっている知識によって、ある状況が解釈できたという場合である。そのような場合には、与えられたヒント以上にくわしく理由を説明してもらう必要はまったくなく、自分の頭のなかに説明の道すじが明瞭（めいりょう）に浮かび上がっているのである。

逆に、③いくら説明を聞いてもわからないというのはどういう場合なのだろうか、を考えてみる必要もあるだろう。説明の対象となる分野の知識をまったくもっていない場合はどうしようもない。その人のもっている知識で理解できる基本的な概念からはじめて、順次対象分野の知識を与えていくというステップをふまねばならない。一度に一つだけ未知のことを教えるという、気の長いステップとなる。

これに対して、その分野のことをかなり知っている人の場合はどうだろうか。一つ考えられることは、説明のなかに出てくる用語の意味・概念がわからないのでわからないという場合である。この場合には、その用語の意味を聞き返さなければならないが、なんとなくわかった気になって、確かめることをおこたってしまうことによって、わからなくなってしまうことがよくある。

もう一つの場合は、先に述べたが、説明の言葉の意味はわかるが、その言葉で説明されている対象世界が明確にイメージできないことによっておこるわからなさである。これは、ものごとの説明は、一つの道すじだけで理詰めで説明されただけでは、人はなかなか納得できないことをしめしている。別の道すじからも説明してもらうことによって、対象に対する理解が深まる。そして自分の頭のなかでその対象を再構築して、自分流に外に出して説明することができねば、ほんとうによくわかったということにはなりにくいのである。したがって、いろいろな質問をして、自分のもつ対象世界のイメージを明確化し、豊かにしなければならない。

教えてもらったことを他の人に言ったり教えたりして、自分の知っていることを再確認するという作業をおこなうことは大切である。その作業の途中で、自分の理解したと思っていたことが、正確でなかったり、論理的におかしいということに気づくことはよくある。そこで考えなおし、自分の理解のしかたを訂正したり、またわからないところを調べなおしたりすることになる。

相手の説明は理解したが、その説明の前提としていることがほんとうであるか、そうではなく、もっとちがった場合やもっとちがった要素が前提条件にからみあってきて、説明された結論にはたどりつかないのではないかという、半信半疑の状態の「わからない」もありうる。科学技術論文では、この種のわからなさがしばしばおこるのである。しかも、論文の場合は、著者にすぐ質問をして疑問を解消することができないので、わからなさが残ってしまう。これは逆に、論文を書く人は前提条件やその他の条件的要素を明確にするとともに、対象としている場面ではそれらの条件以外のことは生じないということを、十分な説得力で述べることが必要であることを示唆（しさ）しているのである。

注3 レイチェル・カーソンの『沈黙の春』などを読むと、各章で述べられていることがわかるということのほかに、一冊の本を読み終えたあとに本全体が言っていること、またそこから暗黙のうちに訴えてくるものが何かということが、ゆっくりと深く読者に浸透してくる。現代という時代の背負っている重い課題、これからの時代に顕在化（けんざい）してくるであろうもろもろの深刻な課題といったことに、思いが行かざるをえない。そういった、④「わかった！」というのとは対極的にあるものごとのわかり方もある。しか

し、これには科学技術あるいは社会についての、広く深い知識と関心とをもっていることが前提となる。科学技術の今後を考えていくうえにおいて、このようなものごとの理解のしかたはとくに重要であろう。

（長尾真『「わかる」とは何か』）

注1　ミッシング・リンク　…生物の進化の過程の中で存在すると想定される生物が、まだ見つかっていない状況。
注2　ヤード　…ヤードポンド法における、長さの基本単位。一ヤードは〇．九一四四メートル。
注3　レイチェル・カーソン　…アメリカ合衆国において一九六〇年代に環境問題を告発した海洋生物学者。

## Ⅱ

「わかる」というのは、物事の意味を理解することだと言ってよいであろう。ただ暗記するのではなく、その意味を理解することが重要である。注4第一章で述べたように、暗記も重要だが、それは理解への第一歩として重要なのである。

たとえば、質量がエネルギーと等価であることを暗記しても、それが何を意味するのかを理解しなければ、ほとんど何の役にも立たない。「質量はエネルギーと等価か」と問われて、正しく「イエス」と解答できるくらいが関の山で、原爆がなぜ膨大なエネルギーを生み出せるのかといった問いに答えることはできない。また、困っている人は助けるべきだということをただ暗記しているだけで、その意味を理解していなければ、自力で困難を乗り越えようとしている人まで助けてしまい、お節介だということになりかねない。

では、意味を理解することが重要だとして、その意味とは何だろうか。意味をもつものとしては、まずは言葉（あるいは一般に表現）が思い浮かぶだろうから、言葉の意味とは何かということから考えてみよう。

言葉が意味をもつというのはふつう、言葉がある特定の物事を表すことだと考えられよう。「イヌ」という言葉はイヌを表し、

「地震」という言葉は地震を表す。これらの言葉がそのようなものを表すことが、それらが意味をもつということだ。かりにこの考えが正しいとして、それでは「イヌ」がイヌを表し、「地震」が地震を表すというのは、どのようなことなのかをさらに問うてみよう。

この問いにたいして、「イヌ」という言葉は私たちの心のなかでイヌのイメージと結びついており、このイメージを介してイヌを表すという説がある。これは意味の「イメージ説」とよばれる。イヌのイメージはイヌとよく似ているから、イヌを表す。したがって、「イヌ」はそれと結びついたイヌのイメージを介してイヌを表すことになるというわけだ。

しかし、もしそうだとすれば、結びつく特定のイメージがない言葉の場合は、どうなるのだろうか。「民主主義」と結びつく特定のイメージはないだろう。それゆえ、「民主主義」はイメージを介して民主主義を表すわけにはいかない。また、「理性」という言葉と結びつく特定のイメージもないから、「理性」もイメージを介して理性を表すわけにはいかない。

意味のイメージ説に代えて、注5ウィトゲンシュタインという二〇世紀を代表する哲学者が意味の「使用説」を唱えた。言葉は私たちの日々の営みのなかでさまざまに使用される。言葉を用いて行われるこのような営みをウィトゲンシュタインは「⑤言語ゲーム」とよぶ。それぞれの言葉は言語ゲームのなかでその言葉に特有の仕方で用いられる。「イヌ」は、たとえば、イヌが眼のまえにいるときに「イヌだ」と発話され、「可愛いね」という聞き手の言葉を誘発し、イヌに近寄るという行動を引き起こす。これは「トラ」の使われ方とは大きく異なる。「イヌ」がイヌを意味するのは、「イヌ」がそのような仕方で使用されるということであり、「トラ」がトラを意味するのも、「イヌ」とは別のある特定の仕方で使用されるということである。

言葉の意味とはその使用だということは、言い換えれば、言葉の意味とはその「働き」だと言えよう。イヌが眼前にいるときに「イヌだ」と発話し、イヌに近寄る動作を引き起こすといったことは、「イヌ」という言葉が言語ゲームにおいてそのような働きをもつことにほかならない。

また、言葉だけではなく、物事も意味をもちうる（ここでは「物事」という言葉を物と出来事の両方を含む広い意味で用いる）。物事の意味についても、言葉の意味と同じ考え方が適用できる。つまり、物事の意味もその物事に特有の働きとして捉えることができる。

たとえば、ロシアのウクライナ侵攻が歴史の大きな転換点を意味するということは、それが歴史を転換させる働きをすることである。また、将棋のこの一手が勝利の確定を意味するということは、それが勝利を確定させる働きをすることである。私たちはある出来事にはどんな意味があるのか、ある一手は何を意味するのかと問うが、それはこの出来事やその手がどんな働きをするのかを問うているのである。

言葉にせよ、物事にせよ、それらの意味とはそれらの働きにほかならない。それらが何を表すかということも、それらがどんな働きをするかということから決まる。「イヌ」がイヌを表すのは、それが言語ゲームにおいてある特定の働き（とくにイヌがいるときに、「イヌ」と発話されるという働き）をするからであり、将棋の一手が勝利の確定を表すのも、それがその対局においてある特別な働き（まさに勝利を確定させる働き）をするからである。

意味が働きだとすれば、意味を理解することは働きを理解することである。言葉にせよ、物事にせよ、ただそれを暗記するだけではなく、その意味を理解することが重要だというのは、ようするにそれがどんな働きをするのかを理解することが重要だということなのである。

（信原幸弘『「覚える」と「わかる」　知の仕組みとその可能性』）

注4　第一章　…第一章では暗記の重要性と暗記が理解の助けとなるということが述べられている。

注5　ウィトゲンシュタイン　…オーストリア出身の哲学者。以後の言語哲学、分析哲学、科学哲学に強い影響を与えた。

**問一**　――線①「『理解できた』」という場合に**当てはまらないもの**を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　先生から数学の公式を説明されたことで、演習問題が解けるようになった。
イ　審判の資格を得るために講習を受け、実戦で正確に判断できるようになった。
ウ　地元の石碑について、高齢の人から聞き取りを行うことで由来を把握した。
エ　部活動の自主練習の中でやり方を工夫し、これまでにない方法を生み出した。

**問二**　――線②「『わかった！』」とあるが、ここで筆者の述べる「わかった！」とはどのような場合を指しているか。次の空欄にあてはまる表現を［Ⅰ］から三十五字程度で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

［　　］場合。

**問三**　――線③「いくら説明を聞いてもわからない」場合として［Ⅰ］で筆者が挙げている例に**当てはまらないもの**を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　説明の対象となる分野の内容に興味・関心がわかない場合。
イ　説明の対象となる分野の知識をまったく持っていない場合。
ウ　説明の対象となる分野の用語の意味・概念がわからない場合。
エ　説明の対象となる分野のイメージが明確化できていない場合。

**問四**　――線④「『わかった！』」というのとは対極的にあるものごとのわかり方」とあるが、本を読むことでどのようなわかり方をすると述べられているか。［Ⅰ］の本文中の言葉を用いて五十字以内で答えなさい。

**問五**　――線⑤「言語ゲーム」の説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　「言語ゲーム」とは、言葉を出さず相手に意味をくみ取ってもらう営みである。
イ　「言語ゲーム」とは、言葉が物とは全く別のものとして用いられる営みである。
ウ　「言語ゲーム」とは、日常の中で遊び心を持って言葉を使うような営みである。
エ　「言語ゲーム」とは、発話により聞き手の理解や行動が誘発される営みである。

**問六**　次の会話文に示すのは、授業で本文 Ⅰ ・ Ⅱ を読んだ後の話し合いの様子である。これを読んで後の問いに答えなさい。

〈会話文〉

生徒A：Ⅰ では「わかった！」という状態について説明しているね。そして、科学技術を考える時には［あ］をもったうえで理解することが重要であるとまとめているね。

生徒B：私は理解していても「わからない」場合があるんだと気づかされたよ。Ⅱ にあるように「わかる」ためには［い］必要があるんだなあ。

生徒A：そうだね。そしてⅡ では「物事を理解する」ことについて考察している気がするね。

生徒B：「言葉」から意味を考察しているよね。結局、Ⅱ では「物事を理解する」には［う］が重要だとまとめられていると思う。今後の勉強の仕方について考えさせられるなあ。

(1)　［あ］に当てはまる表現を Ⅰ の本文中から九字で抜き出しなさい。また、［い］に当てはまる表現を Ⅱ の本文中から二十一字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

(2)　本文中の言葉を用いて［う］に当てはまる表現を二十五字以内で答えなさい。

**第三問題　次の1～5の各文の――線をつけたカタカナを漢字に直しなさい。**

1　雨のために体育祭が来週にエンキされた。
2　彼が述べた一言は、大きなハモンを呼んだ。
3　彼女のキョウグウには同情せざるをえない。
4　少女のユウカンな行動に拍手がわき起こった。
5　彼が作ったトクシュな仕掛けは、人々を魅了した。

令和八年度

# 高等学校入学試験問題　〔国語〕

## 解答欄

### 第一問題

問一 [ ]　問二 [ ]　問三 [ ]

問四 [ 5 / 10 ]

問五 [ ]　問六 [ ]

問七 [ 20 / 10 / 30 / 40 ]

問八 [ ]

問九 (1) [ ] ～ [ ]

(2) [ 20 / 10 / 30 ]

### 第二問題

問一 [ ]

問二 [ ] ～ [ ] 場合。

問三 [ ]

問四 [ 20 / 10 / 30 / 40 / 50 ]

問五 [ ]

問六 (1) あ [ ]

い [ ] ～ [ ]

(2) [ 20 / 10 ]

### 第三問題

1 [ ]　2 [ ]　3 [ ]

4 [ ]　5 [ ]

| 受験番号 | | 名前 | | 得点 | ※ |
|---|---|---|---|---|---|

高国

※印欄は記入しないこと